

東洋學藝雜誌第六號

明治十五年三月廿五日發兌

○自然淘汰法及ヒ之ヲ人類ニ及ホシテハ如何ヲ論ス
有機物ノ度學連數ヲ以テ増加スルニ當リ其間障礙交起
リ其種屬悉ク生存シテ繼嗣ヲ蕃殖スル能ハス遂ニ弱者死
シテ強者ノ生存ニ終ルハ已ニ讀者ノ悟了スル所タルヲ信
スルナリ

今此法ヲ以テ人類ヲ推スニ亦然ラサルナシ即チ障礙交
其蕃殖ノ路ニ起リ隨テ其増加爲ニ大ニ減損セラレ、者ア
ルナリ而シテ其障礙中最モ著明ナル者氣候、酷暑、嚴寒、ノ
類(衣食住ノ缺乏、飢饉、戰爭、傳染病、(コレラ瘡瘡ノ類)ノ如
キ是レナリマルサス氏此類ヲ總稱シテ直接障礙ト謂ヘリ
又同氏ノ所謂間接障礙ト名ツシルモノハ直接障礙ノ如ク
著明ナラスト雖モ其障害タル未タ必スシモ之ニ讓ラズ即
チ謹慎ノ如キ是レナリ由是觀之右ノ障礙ニ因リ人類蕃殖
ノ減損セラレ、ハ吾人ノ常ニ視聽シテ知ルトコロ復タ疑
ヲ容レザルナリ但問フ所ハ其生存スル者皆果シテ體質強
健、才智開明、品行純良、ナルヤ否ヤノ点ニアルノミ
爰ニ兩國アリ相ヒ戰フニ當テ試ミニ其勝孰ニ飯スルヤヲ

問ハシニ必ス智勇共ニ愈ル者ニアルハ智者ヲ俟テ後知ラ
サルナリ例ヘハ昔者希臘衰ヘテ羅馬ノ制スル所トナリ羅
馬衰ヘテ北方強夷ノ亡ホス所トナルカ如シ且ツ支那ノ史
乘ヲ見ユ其戰國ノ時ニ方テヤ常ニ兵強ク國富ム者勝ヲ中
原ニ制シ諸侯ニ覇タリ更ニ今時ニ降リテモ印度土人北米
土人等毎ニ白哲人種ノ壓倒スル所タルカ如シ而シテ必スシ
モ獨リ此ニ限ラサルナリ開明未開ノ兩國相ヒ争フニ當リ
亦身心共ニ劣ル者常ニ開明ノ民ニ敵スル能ハサルヲ氷ノ
日ニ當ルト一般ナリ例ヘハ阿弗利加人濠西太刺利亞人ノ
如キ未開人中戰爭止時ナシト雖モ勝毎ニ強者ニアリ即チ
征戰ニ勇ニシテ會盟ニ敏ナル者ニアルナリ更ニ白哲人種
ノ開明人民ニ至ツテモ其勝敗此法ニ外ナラサルナリ
於是眼ヲ轉シテ一個人ヲ見ルニ其景象全ク之ニ反スル者
アリ抑、自然淘汰法ノ動植物ニ如何ナル關繫アルヤハ今
爰ニ問ハサントモ其一個人上ニ假令其作用全ク無ニアラ
サルモ亦没スル所アルヲ免レサルナリ未開ノ域ニアツテ
ハ病弱、怯愚、皆棄テ、顧ミズ其ヲシテ自ラ死生ヲ成サシ
ムノミダマラス人カ人用ナキニ至レハ之ヲ殺シホツテ

ノトツト人カ其男女老耄シテ職務ニ當ル能ハサレハ遠ク之ヲ驅ツテ山間ニ餓死セシムルノ類ノ如シ又昔者希臘人ハ女子若クハ男子ト雖モ薄弱ナル者ハ其戰時ニ用ナキヲ以テ之ヲ除キ其他食ナク或ハ寒暑ヲ禦ク能ハスジテ死スル者千ヲ以テ數フルニ至リタルハ之レ皆野蠻一般ノ情態ナリ右ノ如ク野蠻ニアツテハ病弱、怯愚皆死シテ其存スル所ノ者ハ獨リ强者ナリ雖然吾人開明ノ民タル者ニ至ツテハ却テ之ヲ憐ミ之ヲ保護スル至ラサル所ナシ貧人ノ爲ニ法ヲ作り舍ヲ設ケ盲聾狂跛ノ爲ニ病院ヲ建テ又從テ百般ノ器用改良、寒暑等ヲ禦クノ術、愈精妙トナル是レヲ以テ此輩ノ壽益延フ其自然淘汰法ニ負ク此ノ如シ余故ニ曰ク之ヲ一個人上ニ加フルキハ其作用沒スル所多シト雖モ然モ罪人ノ或ハ刑セラレ或ハ禁錮セラレ病人不具人ノ娶ラヌト死スル諍鬪人、暴飲人ノ殺戕ニ斃ル狂人ノ自害スル不正者（虛言人不良ノ商賈ノ類）ノ多少社會ノ棄ツル所トナルノ類尙ホ多シ余豈ニ之ヲ知ラサランヤ但此類以テ余カ言ヲ抹殺スルニ足ラサル也請フ逐次其所以ヲ說カシ更ニ進ムニ先タテ讀者ノ注意ヲ乞フ者アリ余カ今

茲ニ企ツル所ノ者ハ敢テ其原ニ溯ホルニ非ス但自然淘汰法ノ之ヲ人類ニ及ホシ其適スルトコロノ際限如何ヲ問フノ一点ニアルノミ而シテ人或ハ余ノ社會必用ノ物ヲ蔑視スルト疑フ者アラシ余カ意此ニアラスト雖モ勢亦已ムヲ得サルナリ

自然淘汰法ノ作用ヲ障礙スル者ノ第一ニ居ルハヘツケル氏カ所謂兵制淘汰法是レナリ此法タル方今開明國ヲ以テ稱セラル者ノ悉ク用ユル所ニ即チ強健ナル少年ヲ選ミ之ヲ徵シテ兵籍ニ入レ若干年間此ニ從事セシムルナリ而シテ其要スル所體質強健其長幾尺ノ類ニシテ其業タル戰鬥ナリ國家ノ爲ニ死スルナリコトニ至リテ讀者或ハ余ヲ以テ常備軍ノ用不用如何ヲ說クト爲サン其今日ニ欠クヘカラサル牢獄訟廷ト一般復余カ言ヲ須タサルナリ但、是レニ由ツテ起ル所ノ結果如何ヲ示サント欲スルノミ果シテ此ノ如ク強健ノ少年ヲ妙送シ去リタランニハ其存シテ繼嗣ヲ蕃殖スル者或ハ薄弱或ハ不具、或ハ多病、或ハ怯懦、ノ類ニ止ルヘシ若シ之ヲ遺傳法ニ徵セハ其體質心性ヲ以テ之ヲ子孫ニ傳フルヤ明ナリヘツケル氏曰ク其強

健活潑ナルニ從ヒ其砲銃ニ斃ルノ期望愈々多ク其薄弱無用ナルニ從ヒ其募兵タルノ期望愈々寡ク一家ヲ起スノ期望愈々多シト嗚呼強健ナル少年ハ年々去テ戰場ニ斃ルナリ戰アルモ場ニ臨マズ家ヲ守リ妻ヲ娶リ繼嗣ヲ遺ス者一ニ薄弱無用ノ手ニ飯スルナリ一念此ニ至ラハ誰カ喟然トシテ嘆セサル者アランヤバイロン侯曰古ヨリ功名害ヲ成ス果シテ如何ソヤト余モ亦此語ヲ大呼セント欲スルナリ蓋シ古ヨリ人君武士カ己ノ功名ヲ貪リ人ノ子弟ヲ驅リ其ヲシテ曠野ニ駢死セシムル者往々ニシテアリ今日常備軍ノ欠クヘカラサルニ至ルモ亦此輩ノ爲ストコロ而シテ世或ハ神佛事スルニ至ルハ何ソ思ハサルノ甚シキヤ

兵制淘汰法ニ關シ尙ホ一事ノ言ハサル可ラサルモノアリ頃日我政府制シテ曰ク武官タル者某官以下若干金ヲ納ルニ非スンバ結婚ヲ許サスト遺傳法ヲ以テ之ヲ見レハ此制遂ニ如何ソヤ

兵制淘汰法ニ次クモノハ貨財及ヒ遺產是レナリミル氏曰今日ノ社會ノ形勢ニテハ公平配分ノ意即チ成就ト功德ノ比例ハ全ク妄想ニ飯スルカ如シ抑モ人運ハ全ク其才德ニ

關セサルニアラス否是レ實ニ其人ヲ助クベシト雖ヒ尙ホ他ニ多ク之ヲ助ケテ其力之ニ勝ルモノアリ而シテ其功德ヲ問ヘハ一モ之アルナシ其中最モ力アル者ハ門地是レナリ彼ノ人運ノ如キハ多ク其生如何ニアリトプラウドホシ氏曰ク金錢ハ衆惡ノ源ナリト余深ク此語ニ服スル能ハスト雖モ是レ亦自然淘汰法ヲ障碍スルモノ、一ニシテ之ヲ有スル者浪ニ妻妾ヲ娶リ子孫ヲ蕃滋スルニ於テハ其害鮮少ナラサルヲ信スルナリ凡ソ人間ノ諸事金銀ノ左右スルトコロ多キハ富ニ北米聯邦ノミニアラサルナリ夫レ金アレハ不肖者モ賢者ト争フヘク不正者モ良者ト競フヲ得シエーキスビヤ—氏詩アリ善ク此狀ヲ盡セリ其詩ニ曰ク

金乎黃而光。有此物兮黑白裝。惡尙可善賤可貴。老可少兮怯可強。君看黃奴結教割教何自在。令人拜癩醜是忘。能續既絕之交。能嫁守貞之孀。盜賊由之得名位。直伍議官坐明堂。吁嗟金乎光而黃。

雖然余カ問フ所只富人ノ子孫ニシテ幸ニ父祖ノ遺產ヲ受ケ或ハ怠惰放蕩ニ流レ多病目ヲ爲スアルニ足ラスト雖モ金錢以テ妻ヲ娶リ後嗣ヲ得ルモノナリ其才能能ク自ラ産

ン更ニ進ムニ先チテ讀者ノ注意ヲ乞フ者アリ余カ今

性ヲ以テ之ヲ子孫ニ傳フルヤ明ナリヘツケル氏曰ク其強

ヲ興スモノニ至リテハ社會中最モ渴望スルトコロノモノ
 安ソ之ヲ責ムルヲ爲サン然ルニ正直ニシテ勞ヲ厭ハズ誠
 ニ人ノ父母タルニ堪タル者或ハ餓死シ或ハ此ニ至ラサル
 モ力以テ婚ヲ結フ能ハサルカ故ニ其嗣タルヲ得ベカラサ
 ルナリ然ラハ遺産ノ法ヲ禁センカ之ヲ禁セハ財本ヲ積ム
 ノ計ナシ財本ナクシハ業ヲ營ム能ハズ故ニ遺産ノ法亦廢
 スヘカラズ遂ニ存スヘカラサルヲ存シ其後嗣ヲシテ長ク
 其病血ヲ傳ヘシム豈ニ悲シカラスヤダーウイン氏謂ヘラ
 シ貨財能ク有用ノ人ニ給シ其ヲシテ各其業ニ安セシム是
 レ以テ稍其弊ヲ補フヘシト余惑フ富民中幾許カ能ク此ノ
 如キアルト

余既ニ兵制淘汰法及ヒ貨財遺産アツテ自然淘汰法ヲ障礙
 スルコトヲ説明セリ今更ニ進テ其愈々行ハレサルコトヲ示サ
 ントス看ニ人口ハ年々歳々増加シ物價日ニ踊躍スレハ活
 計ノ益艱難ナルハ知ルヘキナリ故ニ富テ怠惰ナル者ニア
 ラサルヨリハ焉ソシ其生存ノ方法ヲ計ラサル者ナカラ
 ソヤ而シテ生存競争ニ克ツ者未タ必スシモ善良而已ニア
 ラス時ニ又全ク之ニ反スルコトアリミル氏曰ク人生能ク善

ヲ以テ成ル者アレハ又能ク惡ヲ以テ成ル者アリ惡トハ何
 ソヤ諂諛、服從、吝嗇、不仁、私利ヲ計リ賭博ヲ事トシ貿易ニ
 用ユルニ虛妄、欺騙ヲ以テスルノ類是ナリ加之公然惡計
 ヲ行フテ成ル者亦寡ナカラスト抑モ詭詐、狡獪、虛妄、不實
 ハ商賈ノ慣手ニシテ世人一般亦多少之アルヲ免レサルナ
 リ夫レ牛乳ニ和スルニ米汁ヲ以テシ麻布ヲ被フニ白堊ヲ
 以テシ或ハ尺度秤量ヲ譎ハル者是レ商ト爲テ能ク成ル者
 ナリ而シテ之カ食タル者正直者是レナリ人ノ上ニアル者
 多クハ虛飾、諂屈ニ從事シ而シテ大膽、不羈、信實ヲ好ミ其
 國ヲ愛シ人ニ向ツテ赤心ヲ吐ク者却テ棄ツルトコロタリ
 蓋シ優者ノ劣者ヲ壓倒スルヲ熟考スルニ亦奇怪ヲ感スル
 ナキ能ハズ況ンヤ劣者能ク優者ヲ壓倒シ其劣所ヲシテ世
 々相傳ヘテ絶ヘサラシムルニ至ツテハ奇怪之ニ過クルモ
 ノナシ
 活計ノ艱難ナルヨリシテ結婚後嗣ヲ遺ス者多クハ吾人中
 富貧兩者ニ版ス蓋シ富者ハ金錢ノ力ヲ以テシ貧者ハ輕卒
 ヲ以テス其結果ハ到底劣者ノ蕃殖ニシテ富者ハ放恣奢侈
 ノ爲ニ其體質心性ヲ害ヒ貧者ハ辛苦、飢乏ノ爲ニ之ヲ毀

ル而シテ國民ノ柱礎タル中等人民即チ太富太貧ナラサル者ニ至ツテハ或ハ獨居シ或ハ結婚ノ期遅クシテ其繼嗣ヲ遺サレルモノ多シグレグ氏ケルツ、サクツーン兩人種ヲ論ノ曰クアイランド人(ケルツ種)ハ輕卒、汚穢、奢侈ニシテ馬鈴薯ヲ食ヒ異端ニ溺レ而シテ其居ヤ豚ノ如ク其汚ニ其蕃殖スルヤ家兔蟬蛸ノ如ク其多シ之ニ反シテスコットランド人(サクツーン種)ハ節儉ニシテ先見アリ自尊ニシテ名ヲ貪ホリ品行嚴ニ所信靈アリ其才智ヤ鍊ニシテ敏而シテ其盛年ハ多ク諍鬪獨居ニ過キ婚ヲ結フモ遅ク其嗣タルヤ甚タ寡ナシ今茲ニサクツーン、ケルツ兩種各一千人住スル地アランニ年ヲ經ル十餘代ニ至テハ其住民ノ六分ノ五ハケルツ種ニシテ其財產權力及ヒ才智ノ六分ノ五ハ纔ニ餘ル所ノ六分一ノサクツーン種ノ手ニ落ツヘシ是レニ由ツテ之ヲ觀レハ此生存競争ニ於テ克ツトコロノモノハ劣者ニアツテ其之ニ克ツ所以ハ其德ノ力ニ非スシテ其過失ノ力ナリト

右ノ例ノ類仍ホ多シト雖モ余ハ既ニ自然淘汰法ノ作用沒スルトコロ多キ所以ヲ知ルニ足レリト信スルナリ抑、余

カ再三其作用ノ沒スル所多シト云ヘル所以ノモノハ是レ他ナシ畢竟十分其功ヲ奏スヘクシテ害ニ右述フル所ノ障碍ハ外見ニ過キサルニ至ルヘケレハナリ例ヘハ余カ曩ニ述ヘシ如ク兩國間ニ起レル戰爭ニ於テハ開明ノ國タリハ作用甚タ明ナリ果シテ然ラハ其一人タル者各優ルニ非レハ其之ヲ以テ成ルノ一國如何シ能ク他國ニ克ツヲ得ンヤ此理亦甚タ明ナルヲ覺フルナリ故ニ余ハグレグ、ワルレス、兩氏ノ言ニ從フ能ハスグレグ氏曾テ其著書中最適者ノ生存ナシトノ一篇ノ意ハ顧フニ余カ曩ニ譯出セルモノニ異ナラサルナリ抑、最適者ノ生存ナシトノ語ハ其字義ニ反スルモノト謂フヘシ何トナレハ適者ハ即チ適者ナリ豈ニ他アランヤ若シ最適者ニ生存ナシトセハ其者已ニ適セサルナリ奚ソシテ生存セシテ尙能ク適スト謂フノ義アランヤワルレス氏ハク人間ニアツテハ自然淘汰法已ニ息ムニ幾シト是レ全ク事情ヲ誤解スル者ナリ然レモ余ハ今其本源ニ溯ホラサルベシ尙ホ他日其機アラハ請フ再ヒ之ヲ論セン余ハ將ニ左ノ語ヲ以テ本題ヲ畢ヘントス夫天道ハ俗眼以テ之ヲ窺フ能ハス僅ニニユーートン、スペンサル輩ノ

人傑出デ、之ヲ看破スルアルノミ惡ソ知ラン常人ノ以テ
 法外トナストコロノモノ是レ却テ天ノ其雄圖ヲ行フ所以
 ナラサルヲ其徐ナル所以即チ其實ナル所以歟學人ノ眼ヲ
 以テ觀ルニ宇宙ハ混沌分ツヘカラサルカ如シト雖モ其障
 礙漸ク去リ率ニ其通法ヲ發見スヘジギヅ一氏曰ク天動ハ
 限ルニ小範ヲ以テス可ラス天一歩シテ數世去ルト (畢)

○日本製造論一斑 (前號ノ續)

川田德二郎

(二) 政府ノ工業ニ干涉スヘカラサルヲ 工業ニ干涉セ

スシテ之ヲ自由ニ任スルノ一事モ亦百工ノ進歩ヲ促スニ
 欲クヘカラストナス夫レ日常ノ需用物ヲ製作シテ消費者
 ノ用ニ供セシメノヲ希望スルハ蓋シ生産者ノ本分ナレ
 ハ其工業ニ從事スルニ際シ些少タリト之レカ障害ヲナス
 モノアレハ其志望ノ發達ヲ壅塞スヘキハ疑ヲ容レヌ政府
 固ヨリ干涉ヲナスノ一点ニ於テハ吾人カ取ラサル處ナレ
 此レカ障碍トナルヘキモノヲ防衛スルハ抑々其職掌ヲ
 ラサルヲ得ス若シ夫レ他人ノ權限ヲ侵サス專ラ本分ノ利
 益ヲ領得スルニ止マレルノ自由ヲ要スルニ方リテ此順序
 制限ヲ定ムルハ安ソ其職掌義務ト謂ハサルヘケンヤ敢

テ之ヲ干涉ト稱スヘカラサルナリ其干涉ト謂ツヘキモノ
 ハ則チ余カ左ニ反復述フル如キヲ云フナリ

抑々此事ヤ常ニ余カ頭腦ヲ疲シムル所ニ蓋シ製造ノ隆
 興ヲ希望スルニハ極メテ緊要ナル件トセリ我邦後來製造
 ノ旺盛ヲ希望スルニハ偏ニ干涉主義ヲ止メ專ラ之ヲ内地
 ノ自由競争ニ任せサルヘカラス然ルニ政府還テ故ラニ或
 ル業ニ干涉シ時トシテハ或ル業ヲ起シ人民ト其利ヲ爭ハ
 ントスルノ事アレハ人民ハ何ニ由テカ其利ヲ占ムルヲ得
 ンヤ人民其利ヲ占ムル能ハサルヤ斯ノ如シ之ヲ政府ノ一
 方ヨリ見ルモ亦強チ其利ニ居ルヤヲ保スヘカラス試ミニ
 政府ノ事業ヲ觀察スルニ多クハ製造場建築及ヒ裝置ノ徒
 ラニ洪大ニ過シルアリ官吏ノ其事物ニ通曉セサルアリ或
 ハ又事業ノ急ヲ要スルモノモ一ハ官吏中説ノ相合ハサル
 カ爲メ一ハ委員ノ屢々交替轉任スル等ヨリノ荏苒永時ニ
 亘ルカ如キアリ皆チ官業ノ免ルヘカラサル弊害ナリ況ン
 ヤ費用ノ多分ヲ要スルノ一点ニ於テオヤ到底人民ノ事業
 ト日ヲ同フシテ談ルヘカラサルナリ故ニ政府ノ創スル事
 業ニシテ其益ヲ見ントスルハ到底其望ムヘカラサルノコ

トナリ否ナ其害ヲ人民ニ與フルヲ尠少ニ止マラサルナリ
 政府工業ニ從事シテ其益ヲ見ルヘカラサルヤ此ノ如シ今
 復之ヲ三省シテ其生産者ニ如何ナル關係ヲ來タスヤヲ思
 惟スルニ政府自ラ製造ヲ勤ムルニ於テハ費額ノ一点ノ如
 キハ大抵始メヨリ省ミル處ナク之レガ價值ヲ算計スルニ
 管ニ材料及ヒ勞力ノミニ由レルヲ以テ其製作品ハ人民
 産製ノ品物ニ比スレハ廉ナルヘケレハ消費者ノ一方ヨリ
 觀レハ此品物ヲ購求スルノ利タル俟タスト雖モ是レ
 特ニ消費者ノ利ニ止マリテ偏ニ一局部ヲ利スルノ見ノミ
 今又之ヲ生産者ノ一方ヨリ察スレハ其損害ノアル處實ニ
 尠少ニ止マラサルヘシ何トナレハ生産者ハ産品ノ價格ヲ
 定ムルニハ預カシメ材料及ヒ勞力ノ價值ハ勿論其他製造
 場及ヒ機械等ニ費セル資本ノ一点ヲ考ヘサルヘカラス其
 他尠少ノ事ニ至ルマテ産品ノ價格ニ算入スレハ人民産出
 ノ製品ハ概テ政府ノ製品ヨリ高價ナル所以ナリ故ニ消費
 者ハ常ニ政府産出ノ品ヲ需メテ人民産製ノ物ヲ購ハス是
 レ竟ニ生産者ノ困弊ヲ來タスノ原因ト謂フヘシ斯ノ如キ
 情况アルカ故ニ政府自ラ事業ヲ起シ人民ト其利ヲ争フニ

於テハ一般生産者ハ矢敗ヲ取ラサルヘカラス好シヤ政府
 自ラ人民ト其利ヲ争ハサルモノトナスモ若シ或ハ二三ノ
 生産者ニ資本ヲ扶助スルカ或ハ他ノ保護ヲ加フルトキハ
 其保護ヲ受クル生産者ハ固ヨリ其利多カルヘキモ其他ノ
 者ハ弊害ヲ被ムルヲ尠ナカラサルヘキナリ故ニ政府ニシ
 テ保護ノ政畧ヲ擇ヒ生産者ノ利ヲ策ラントセハ須カラク
 其利ノ物生産者ニ普及スルヲ期スヘシ然レモ之ヲ實行
 スルヤ甚タ難シ故ニ寧ロ盡ク之ヲ内地ノ競争ニ一任スル
 ノ勝レルニ如カサルナリ
 夫レ既ニ政府タルモノ人民ノ事業ニ干渉スルヲ止メ顛
 倒偏廢ノ保護ヲ廢シテ之ヲ内地ノ競争ニ任スルニ於テハ
 品物ノ良且ツ廉ナルモノヲ購求シ得ヘキニ至ルハ疑ヒナ
 シ何トナレハ人民一般ニ政府ノ力ヲ假ラスシテ其ヲ勤ム
 ルニ至レハ品質及ヒ製作ヲ精良ナラシメサルヘカラスレ
 ハナリ是レ即チ内地自由競争ノ能ク消費者及ヒ生産者ニ
 均シク利ヲ分ツト爲ス所以ナリ若シ夫レ然ラスシテ品物
 ノ劣惡ナルモノ興リテ良善ナルモノ跡ヲ屏スルアラハ人
 民ノ需用減却シテ生産者ノ衰敗スヘキハ論ヲ俟タス到底

良品ヲ生シ廉品ヲ興シ猶ホ且ツ新工風ヲコラシ消費者ノ望ニ任セシメテ期スヘキナリ之ヲ約言セハ品物ヲ善良ニシ價格ヲ廉ニスル是ナリ斯ノ如クナレハ其需用ヲ增益スル將ニ窮極ナカラント左スレハ政府カ人民ノ製造事業ニ干涉スルハ徒ラニ人民ノ不平ヲ滋シテ該業ノ進歩ヲ杜クノ道ト謂ツヘキ歟

(三) 商業ノ開弘 商業ヲ開弘シテ我國ノ製造品ヲ廣ク

萬國ニ播布スルノ緊要ナルハ今又コノニ嗚々スルヲ要セスト雖モ數言ヲ吐露スルハ敢テ妨ナカルヘシ

昔時佛蘭西以太利西班牙等ノ諸國ハ州縣各其制ヲ異ニシ内外ノ別ナシ一般ニ商業上ノ自由ヲ占領スルヲ得サリキ故ニ各州縣ノ人民モ亦強テ好テ交際ヲ他ニ求メテ隨テ競争ノ志望奮起セサリシナリ既ニ競争ニ志ナケレハ製造ノ事業ニ於テ人民相共ニ熱望努力スルノ事ハ望ムヘキニアラス我邦維新前ノ情況此ノ如シ然ルニ英吉利ト和蘭陀トハ頗ル自由ニ放任シ漸ク外國交際上ノ事業ヲ開弘シ之ニ由テ領得シタルノ利既ニ甚シトセス我邦維新後ノ情況此ノ如シ今ヤ學術愈々進歩シ法律彌々開闡シ鐵道、電信、

採鑛、造船、ノ事業皆ナ蔚然トシテ興起セントス殊ニ近時ハ外國ノ交際滋々開闡シ其昌盛大ニ後來ニ期望スヘキナリ此時ニ方テ政府ハ宜シク一局部ノ權理自由ヲ保護シ他局部ノ權理自由ヲ妨害セサラントニ注意シ人民ハ自己本分ノ利益ヲ領得スルノ自由ヲ求ムルヲ計ルヘシ而シテ自己ノ識見ヲ進メ自己ノ希望ヲ高クスルコトコソ肝要ナリ

(四) 統計表編製ノ完備 夫レ貿易統計表ナルモノハ輸

出入ノ商況ヲ報シ品物ノ價值ヲ告クヘキナリ故ニ商業ノ盛衰興廢ヲ觀察スルニハ特ニ之ヲ緊要ナリトス然レモ猶ホ之ノミニテハ製造ノ興隆ヲ望ミ工業ノ發達ヲ期スヘキニアラス何トナレハ大商ノ利害ハ勿論此点ニ關スル所モ大ナルヘケレモ必スシモ輸出夥多ナレハトテ内地商業若シクハ生産者ノ勤業ノ盛ナル徴ト見定ムヘカラザルナリ世人ハ動モスレハ貿易輸出入表ヲ見テ直チニ内地工業ノ全況ニ臆斷ヲ下タスモノ多ケレモ余ハ之ヲ完全無缺ノ見解ト認メサルナリ蓋シ貿易商業繁盛スレハ工業隨テ榮昌スルハ理ナレモ夫レ間接ノ影響ナレハ商業繁昌スレ

ハトテ必ス内地ノ工業奮起スヘシトハ定メ難カルヘキナ
 リ況ンヤ輸出ノ増加ヲ見テ直チニ我邦製造ノ繁昌ヲナセ
 リトノ臆斷ヲ下タス如キハ万々理ニ悖ルナルヲヤ且ツ夫
 レ輸出ニ増加アリト云ヘハ内地消費ノ減少ヲ推測スヘク
 輸出ニ減少アリト云ヘハ内地ノ消費ニ増加アリシヤヲ疑
 フヘケレハ到底輸出入表ヲ見テ直チニ内地勤業ノ實況ヲ
 會得ストナスハ誤謬ノ見ト謂ハサルヘカラス
 世人ハ常ニ統計表ヲ見テ輸入ノ輸出ニ超過スルアルヲ憂
 フ然レモ其憂フ所以ハ管ニ金貨ノ外國ニ輸出スルニ在ル
 ノミ余ノ之ヲ憂フル所以ハ敢テ金貨輸出ノ一點ニ止マラ
 サルナリ抑々輸入品ノ需用増加シテ内地産ノ需用減スレ
 ハ其弊タル内地市場ノ貿易ヲ壅塞シ隨テ其作業ヲ廢滅ス
 ヘキナリ是レ吾人カ最モ意ヲ注クヘキ所ニシテ重大ノ論
 點ト謂ハサルヘカラス因テ之ヲ未萌ニ制シテ内地ノ作業
 ヲ獎勵セシニハ宜シク内國消費品統計表ヲ製シテ之ヲ人
 民ニ報告シ以テ内地勤業ノ實況ヲ一目ノ下ニ會得セシム
 ルニ若クモノ莫カルヘシト思惟スルナリ蓋シ余カ此統計
 表ニ望ムトコロニハ管ニ品名ト品數ヲ記スルニ止マラス

各地ノ市價及ヒ品質ヲ精密ニ評シ以テ之ヲ記スルニアリ
 即チ之ヲ詳言スレハ三府三十餘縣ニ於テ消費セラル、品
 物ノ名、數量、出產原地、原地ノ價、製造地ノ價、需用及消費
 セラル、地ノ價等ヲ精細ニ明記シテ之ニ適當ノ品評ヲ加
 エ世ニ公告スルニアリスノ如クスレハ生産者ハ彼此ヲ審
 察シ競争ヲ試ムヘキヤ否ヲ審カニシ苟クモ外邦へ運搬シ
 販賣シテ利ニ居ルヘキ見込アルノ品ハ此レカ産製力ヲ増
 シ以テ益々本邦製造ノ隆興ヲ希圖スルノ方便ヲ得ヘキナ
 リ彼ノ一般ノ輸出入表ノ如キハ必スシモ内地工業ノ獎勵
 ニ直接ノ利害ヲ與エサルヘシ然レハ則チ殊ニ内地消費品
 ノ統計表ヲ作りテ人民ニ報告スヘキハ洵ニ今日當務中ノ
 急トナスヘキナリ

(五) 賦稅適宜 此他工業ノ振作ニ最モ緊要ナリト看做
 スヘキモノハ則チ人民敢爲勇往ノ氣象是ナリ凡ソ工業ノ
 進歩ト發明新工風ヲ成功スルニハ敢爲ノ氣象ヲ養フノ必
 要ナルハ智者ヲ俟テ後チ知ラサルナリ實ニ豐富貧困ノ別
 ナク忍耐、勤勉ハ須臾モ忽ニスヘカラス然ルニ人民ノ勤
 勉力ヲ加ヘ有爲ノ氣象ヲ添ユルニハ余ハ以テ賦稅ノ宜シ

キヲ得ルヲ極メテ緊要ト考フルナリ然レモ余ハ固ヨリ賦
 税ノ力ニノミ由ルヘシト云フニハアラス蓋シ限極ナキノ
 工業ヲ限極ナキノ地ニ進ムルニハ固ヨリ非常絶群ノ勢力
 ヲ以テ勤勉努力セサルヘカラス畢竟余カヨ、ニ一言スル
 所ノモノハ則チ租税ハ人民カ勤勉ノ氣象ヲ獎勵スヘキ一
 助タリト謂フニ外ナラサルナリ而シテ之ヲ獎勵スルニ賦税
 ノ割合如何ニ由ルト爲スハ余カ本論ノ主旨ニアラサレハ
 今故テニ之ヲ詳説セサルナリ

第二 道德上ノ要件

- (一) 製造者ノ勇往熱心並ニ製造場監督ノ寛大
- (二) 職工ノ謹慎ナルヲ要ス

道德上ノ要件ハ概チ教育ニ關係ヲ有スレハソハ其ノ教育
 上要件ノ部ニ讓ル又本節(一)ノ如キハ既ニ已ニ常人ノ知ル
 トコロナレハ併セテ詳解ヲ此ニ省ク唯(二)ノ條ハ余カ迂
 癖ヲ免レサルノ説ナレハ少カ辨シテ以テ世ノ一笑ヲ招カ
 ムトス

製造ヲ上進スルニ方テ品物ノ精妙ヲ希求シ之ヲ萬邦ニ跨
 ルニ至ルニハ技術練達、資性良善、ナルノ職工ヲ増加セサ

ルヘカラス然ルニ世開クルニ隨テ職工ノ意志或ハ政治ニ
 向ヒ說話言論少モ取ルヘキトコロナク其疎狂殆ント云フ
 ヘカラス且ツ技術ノ上進ニ意ヲ止メス漫リニ奢侈ニ向ヒ
 竟ニ其行ノ日、ニ廢退スルハ洵ニ歎スヘキナリ

抑、近時職工ノ行ノ廢退セル原因ヲ尋ヌルニ大抵ハ飲酒
 ヨリ出ツルモノ、如シ其故則チ職工ハ大概教育ヲ受ケス
 智才ニ乏シケレハ平常ノ勞働ヲ慰スルニハ到底高尚ノ樂
 ヲ取ランヨリハ寧ロ酒色ニ於テスル癖アル所以ナリ酒色
 ニ耽レハ職業ヲ怠ルハ自然ノ理ナリ縱令又職業ヲ怠ラヌ
 トナスモ職工ノ給料以テ酒色ノ料ニ供フルニ足ラス然レ
 ハ其結果ハ竟ニ惡行ヲナスニ至ルナリ古人ノ所謂小人罪
 ナシ玉ヲ懷ヒテ罪アリト蓋シ此言ナルヘシ斯、ル景況ヲ
 將來ニ續ケナハ職工ノ才智、忍耐、勞氣、工風、等ハ自然ニ墜
 落スヘキナリ之ヲ防カンニハ職工ノ子弟ヲ小學ニ入ラシ
 メ教育ヲ授クヘキヤ未タ以テ直接ノ預防ト謂フヘカラス
 酒色ヲ高價ニ來タサシムヘキヤ職工ノ遊興ヲ禁止スヘキ
 ヤ必竟行ハレサルノ見ノミ余以謂ラク凡ソ職工幾萬ノ多
 キ或ハ勞働勤勉以テ子孫ノ富貴ヲ預計スルモノモアルヘ

ケレヒ多クハ酒色ノ歡娛ヲ預念シテ平日ノ苦勞ヲ勤ムルノ徒ナリ故ニ酒色ヲ高價ナラシメ或ハ酒亭、妓樓ニ入ルヲ禁セナハ其平日ノ勞働ヲ退縮セシムヘキハ知ルヘキナリト抑、酒色ノ害遂ニ惡道ニ入り製造ノ隆興ヲ害スト云フト雖モ到底之ヲ止ムルノ事ハ難ナリ余ノ之ヲ預防スル間接ノ方トハ止、ニ之ヲ減少スルノ方ニシテ即チ演劇、場、見、物、淨瑠璃、軍談、公園、其他一般職工ノ耳目ヲ娛マシムルノ所ニ入ラシメ漸々耳目ノ娛ヲ取ラシメ以テ酒癖ヲ減少セシメントスルニアルノミ演劇、見、物、皆ナ既ニアリ然レヒ今日ノ演劇ノ如キハ見料廉ナラス故ニ職工ノ給料以テ之ニ費スニ足ラストナス此一点ニ於テハ政府宜シク其方法ヲ設ケ當時英國ノ有様ヲ我邦ニ來タサマルニ注意スヘキナリ

(此稿未完)

○度量衡說 附貨幣

鯨島 晋

我國度量衡ノ制ハ本支那國ノ制ニ擬スルモノニ爾來少ク修整スト雖モ尙精良ナル能ハス近世ニ至リ百事廢替シ學術進步セス從テ此ノ制モ今日ノ錯雜ヲ致セリ然レヒ維新以來我政府深ク注意シ漸次改正ヲ加フルニ至リ

シハ亦文明ノ徵ト謂フベシ然而ノ此ノ制ノ不良ハ獨リ我國ノミニ非ス彼ノ文明ナル英米國ノ制ヲ見ルニ尙一層ノ不便ヲ覺フ唯佛國ノ(システーム、メトリック)ハ簡易善良ノ法ニ現ニ和蘭、白耳義、端西、以多利、希臘、西班牙、葡萄牙等ノ諸邦皆之ヲ用井且學術上ニハ英米國モ亦之ヲ用ユ因テ茲ニ我國及ヒ佛國ノ度量權衡ヲ抄録シ併テ和佛、英、米ノ比較表ヲ載ス諸君幸ニ是正ヲ賜ハ、聊カ學術參考ノ補益タラント云爾

- 第一 長度
- 第二 面積度
- 第三 立積度
- 第四 量
- 第五 衡
- 第六 貨幣

第一 長度

我國長度ノ原位ヲ尺ト謂フ尺ハ支那ノ黃鐘律ニ基ク○彼國黃帝ノ時伶倫ナル者ニ命メ音樂律ヲ定メシメ中式ノ鉅黍ヲ選ミ一黍ノ長ヲ一方トシ九分ヲ一寸トナシ即チ八十分ヲ黃鐘ノ長トス之ヲ縱黍尺又宋尺ト稱ス我國曲尺ノ八寸ニ當ル

現今用ル所ノ尺ニ二種アリ一ヲ曲尺ト云フ木匠ノ造營ニ用ル鋼鐵製ノ鉅ト名クルモノナリ其形第一圖ノ如(圖ハ

本説ノ終リニ出ス一ノ圭折メ直角ヲ爲ス直角ノ股ハ即チ
 縱黍尺ノ一ト八分ノ一ニ當ルモノニ之ヲ原位トシ物ノ
 長度ヲ知ル〇一ヲ竹尺ト云フ 倭名「タカ
 ハカリ」 裁縫等ニ用ルモ

ノニノ曲尺ヲ四分シ之ニ一分ヲ加テ一尺トナス即チ曲尺
 ノ一尺二寸五分ニ當ル此尺ハ竹片又鯨鱗ヲ以テ作ル故ニ

又鯨尺ト謂フ〇中古服尺ト唱ルモノアリ曲尺ノ一尺二寸
 ニ當ルト云フ今之ヲ廢ス〇曲尺ノ裏面ニ裏尺アリ其一尺

ハ表ノ一尺四寸一分四厘餘ニ當ル即チ曲尺方面ノ絃度ナ
 リ工夫之ヲ用テ極度ヲ知ト云フ

凡ソ十尺ヲ丈ト云ヒ一尺ヲ十分シテ寸トナス分、釐、毫、絲、
 忽ハ皆寸以下十ヲ以テ分ツ位序ナリ

曲尺六尺ヲ一間トシ六十間ヲ一町トシ三十六町ヲ一里ト
 ス〇里ハ本村里ノ里ニシテ往古一村ヨリ一村ニ至ルノ距離

ヲ一里ト稱ス然レモ大抵六町前後タリ近古正親町帝ノ時
 地ノ三十六畝ヲ表シ三十六町ヲ以テ一里ト定メ全國ニ一

里塚ヲ築カシム此ヨリ先キ六尺五寸一間ノ制アリ是ニ至
 テ上古ノ制ニ復シ六尺ヲ以テ一間トナス

凡ソ竹尺ノ長二丈七尺 或ハ二丈八尺ヨリ三
 丈ニ至ル一定セズ ヲ以テ一端ト

シニ端ヲ以テ一匹トナス皆絹布ノ度名ナリ

佛國長度

佛國長度ノ原位ハ地球ノ子午線四千萬分ノ一ニシテ

ルト名ツク我三尺三寸ニ當ル此長度ハ其國ノ寶庫アルシ
 | ウニニ在ル白金製ノメートル 攝氏驗温器ノ零ニ摸造ス
 度ヲ以テ度ル

ルモノニシテ大抵木製ナリ
 | メートル十分ノ一ヲデシメートル、百分ノ一ヲサンチメ

メートル、千分ノ一ヲミリメートル、ト云フ〇道路山野等ニ
 用ル測量鎖ト名ツクル鐵鎖ノ長サ十メートルナルモノヲ

デカメートルト云ヘクトメートルハ百メートル、キロメ
 | トルハ千メートルニ當ル古昔ハ路程ノ原位ニリユ一四

ロメートルト名クル度ヲ用シカ現今ハキロメートルヲ用ユ
 | ミリヤメートルハ十キロメートルニシテ地理學上ノ大距

離ニ用ユル原位也メートル以下ノ小距離ニシテ半メー
 | ル若クハ倍デシメートル等ノ各デシメートル、サンチメ

メートル及ヒミリヤメートルニ分チタルモノヲ用井テ之ヲ
 度ル

第二 面積度

我國ニ於テハ從來面積ヲ度ルニ尺寸分等ノ方積ヲ原位ト
スル事甚タ稀ニシテ間々算學家ノ問題ニ於テ之ヲ見ルノ
ミ故ニ畧ス

田圃等ノ積ヲ度ニハ方一間ノ原位ヲ用ユ之ヲ步又坪ト名
ク按スルニ紀元一千三百零六年孝徳天皇第二年始テ戶籍
班田ノ法ヲ定メ田ノ長サ三十步廣サ十二步ヲ以テ一段ト
ナシ十段ヲ一町トス然ルニ近世又畝ノ名アリ隨テ段町ノ
實モ古代ニ異ナリ即チ田三十步ヲ以テ一畝トシ三百步ヲ
一段三千步ヲ一町トス

佛國面積度

佛國面積ノ原位ハ表面ノ大小ニ隨テ成ス所ノ方積^{カレ}ニ田
地及ヒ諸物躰ノ面積ヲ度ニ用ユ○田野等ニハ測量鎖ヲ用
ルヲ以テデカメートル方ヲ原位トス之ヲアールト云フ又
ヘクタール、サンチアールノ名アリヘクタールハ百ア
ール即チヘクトメートル方、サンチアールハアール百分一
即チメートル方ナリ

第三 立積度

物躰ノ容積ヲ度ルニ一尺立方、一寸立方等ノ原位積ヲ用

ルモノトス此法モ從來我邦ニテハ算學家ノ問答等ニ用ル
ニ過キス故ニ今之ヲ省ク

佛國立積度

佛國ニテ諸物ノ容積ヲ度ルニハ常ニメートル、デシメー
トル等ノ原位立方積^{キユーブ}ヲ用ユ幾何法ニヨレハデカメー
トル、キユーブハ千立方メートルニ當リデシメートル、キユー
ブハメートル、キユーブ千分ノ一ニ當ル他皆之ニ倣フ薪材
等ヲ度ルニハメートル立方ノステールト名クルモノヲ
用ユ^{第五圖}又デカステール、デシステールノ名アリデカ
ステールハ十ステールニ即チ十メートル立方、デシス
テールハステール十分ノ一ニ即チ百デシメートル立方
ニ當ル又民間ニハ半デカステール、倍ステールノ二種ア
リテ併用ス○我國ニテモ間々此法アリ

第四 量

量ハ和語ニテ「マスメ」ト謂フ穀類及ヒ液体ノ容ヲ知ルノ
法ナリ我國ノ量ハ支那國ノ制ニ基クモノニ粟一粒ヲ一
粟トナシ六粟ヲ圭トシ十圭ヲ抄、十抄ヲ撮、十撮ヲ勺、十勺
ヲ合、十合ヲ升、十升ヲ斗、十斗ヲ石トナス
上石ヲ斛ノ字ニ作レリ然レモ

唐宗已來五斗ヲ斛ト
ナシニ斛ヲ石トナス

按スルニ文武天皇慶雲二年今ヲ距ル七一一年始テ斗量ヲ作り

元明天皇和銅六年今ヲ距ル七一一年ニ至リ權衡度量ノ制ヲ遍

ク諸國ニ頒布ス其後五百七十有餘年ヲ歷テ後三條天皇延

久四年ニ升法ヲ定メリ當時ノ一升ハ今ノ八合ニ當ル中古

ノ量モ今ノ京斛ニ比スレハ稍小ナリ支那國古代ノ升ハ第

六圖ノ如ク今ノ升ヲ以テ檢スレハ僅ニ一合六勺三撮三

抄餘ナリト云フ明朝ノ斛ハ第七圖ノ如クニシテ其二量即

チ一石ハ京斛ノ四斗九升九合零九抄ニ當ル○我邦中古ノ

升ハ今ノ升ノ如ク方五寸深二寸五分其積六十二立方寸五

分ナリ○今民間ニテ常ニ用ルモノヲ京量ト唱フ第九圖ノ

如ク内口ニ鐵絛アリ方四寸九分深二寸七分其積六十四立

方寸八分二厘七毛ナリ但絛ノ積ヲ減ス可シ○穀類ヲ量ルニ竹木等

ニテ造リタルマスガキ概ト名クルモノヲ用井上面ヲ平截ス

京量ノ法ニ準シテ數品ノ量器アリ左ノ如シ

- 一斗 方一尺零五分 五升 方八寸四分
- 一斗 深一寸八分八厘 五升 深四寸五分九厘
- 五合 方三寸九分 二合半 方三寸
- 五合 深二寸一分三厘 二合半 深一寸六分八厘余
- 一合 方二寸二分
- 一合 深一寸三分九厘

此ノ他五勺、二勺、五撮等ノ小量アリ今茲ニ畧ス

佛國量

佛國ニテ穀類液類ノ容積ヲ知ルニリートルト名ツクル量

アリリートルハデシメートル立方ノ容積ニシテ我五合五

勺零六抄余ニ當ル而ノ商家ノ用ルリートル量ハ皆圓筒形

ニシテ方ナラス穀類ニ用ル量器ハ概テ木製ニシテ第十圖ノ

如シ飲液ニハ第十一圖ノ如キ錫製ヲ用ユ其他民間液類ニ

用ル量器數種アリテ其製各異ナリ之ヲ大別シテ銅錫及ヒ

白錫製ブリツキノ三等トナス各流物ノ質ニ從テ用ユ

リートル上上下下各數筒ノ量名アリリートルヲデカリート

ルト云ヒ百リートルヲヘクトリートル、千リートルヲキ

ロリートルト云フリートル十分ノ一ヲデシリートルト云

ヒ百分ノ一ヲサンチリートル、千分ノ一ヲミリリートル

ト云フ

第五 衡

權ハ稱錘ノ義ニシテ物ノ輕重ヲ稱リ其平均ヲ得ルモノナ

リ倭名ニハカリノオモミト謂フ衡ハ横木ニシテ俗ニサ

ホト唱フ因テ物ノ輕重ヲ稱ルノ法ヲ通シテ權衡或ハ衡

ト稱ス

我國衡ノ制ハ支那ノ制ニテ黍ヨリ起ル黑黍一粒ノ重ヲ一黍トナシ十黍ヲ纍、十纍ヲ銖、六銖ヲ鎰、四鎰ヲ兩、十六兩ヲ斤、十斤ヲ衡、三衡ヲ鈞、四鈞ヲ石、四石ヲ鼓ト云フ是レ上古支那國ノ制ナリ○方今我國ノ衡名ハ一錢ノ重即チ一文目ナリハ錢ノ零字 分一ヲ毛ト云フ四分ヲ兩トナシ十兩即チ百六十分一ヲ厘トナス按スルニ兩ハ歷代大ニ異同アリ黃帝ノ一兩ハ今ノ六分、後周ノ一兩ハ十八分、漢ノ一兩ハ三分五分、明ノ一兩ハ十分、其他枚舉ニ違アラズ○方今通シテ用ル斤モ尙數種アリテ百六十分ヲ唐目ノ一斤、百八十分ヲ當飯一斤、二百二十分ヲ平野目、二百三十分ヲ白目、二百五十分ヲ茶目、三百分ヲ分銅目トス今爰ニ物品ニ從ヒ或ハ國郡ニ仍テ斤兩ノ差異アル例ヲ左ニ掲ク

- 第一 人參 猪油 煙草此等ハ和物ニシテ唐目ヲ用ユ
- 第二 當飯 杏仁 地黃 黃連 當飯目
- 第三 甘艸 山飯來 大黃 白檀 丁子 胡椒 檳榔子 白目
- 第四 紅花 百分一斤

第五 硫黃

三百二十分

第六 木附子

百三十分

第七 煎茶二百五十分或ハ三百分又駿州ニテハ二百分

第八 山椒

八十分

第九 沈香

二百十分

第十 木綿平野目又丹波ニテハ三百分紀州ニテハ二百

分

權衡ニ數種アリ通ノ衡ト謂フ其大ナル物ヲ秤、小ナル物ヲ等子ト名ツク秤ハ和名(ハカリ)ト云フ第十三圖ノ如ク木槌ノ一端(イ)ニ鉤アリ稱ルヘキ物ヲ懸ケ其側(ロ)ニ紐アリテ衡ヲ鈞ル紐ノ右部ヲ均ク若干數ニ分チ物ノ輕重ニ從テ錘ノ位置ヲ定ム譬ハ錘五貫分ノ點(ハ)ニ於テ衡槌平準スルキハ則チ(イ)ニ在ル物ノ重力五貫分ト知ルヘシ此秤ハ古代羅馬國ニテ用ヒシ者ト同種ナリ民間轉用スル所ノ秤ハ大抵二三尺ヨリ五六尺位ノ長ニシテ十斤以上ノ物ヲ稱ルニ用ユ俗ニ(チギ)又ハ(チキリ)ト唱フ蓋シ唐音秤ノ謬ナラン厘等子ハ俗ニ(レイラング)ト稱ス唐音(レイテンツウ)ノ訛ナリ此衡ハ第十四圖ノ如ク常ニ小函ニ收メ最

モ輕便ノ器具ナリ製方ハ秤ニ同シ○小厘等ハ厘毛ヲ知ニ足ル同質ノ衡ニノ專ラ藥肆等ニ用ユ又黃金ヲ稱ル故ニ金稱ノ名アリ○天平ト名ツクル一種ノ衡アリ此衡器ハ現今歐米諸國ニテ用ル常衡ニ殆ント類似ス衡ノ左右ニ盤アリ物及法馬俗ニ分銅ト云ヲ載セ針口ノ位置ヲ看察シテ幾許重ナルヲ知ルモノナリ第十五圖ノ如シ

佛國衡

佛國重量ノ原位ヲグラムト謂フグラムハ攝氏驗温器四度ノ蒸溜水サンチメートル立方ヲ排氣鐘内ニテ秤ル所ノ重位ニノ殆ント我二分六厘八ニ當ル○十グラムヲデカグラムト云ヒ百グラムヲヘクトグラムト云ヒ千グラムヲキログラムト云フ即チ一メートルノ重ナリ十キロヲミリヤグラム百キロヲキヤンタール千キロヲトンヌ又トンノ一ト云フ即チ一メートル立方蒸溜水ノ重ナリグラム十分ノ一ヲデシグラム百分ノ一ヲサンチグラム千分ノ一ヲミリグラムト云フ即チミリメートル立方ノ水重ナリ

佛國ニテ廣ク用ル權衡ハ第十七圖ノ如シ其用法ハ我國天

平ト同シ錘子ハ常ニ銅及ヒ鍍ヲ以テ製ス其形大抵第十六圖ノ如シ
(未完)

○非時事小言論

第三章 國權論

上田秀成稿

前章ニ權ハ力ナリト論セリ讀者モシ未タコレヲ記臆セハ國權トハ一國ノ獨立ヲ保持スヘキ力ナルヲ了スルナラシ既ニコレヲ了セハ前章ニモ論セシ如ク此ノ力ハ強大ナルヲ要スルコトモコレヲ了スルナラン今氏カ論セラル所ヲ見ルニ氏モ亦コレヲ願ハルモノナリ否餘リニコレヲ願ハルヨリ遂ニコレヲ爲スノ順序ヲ誤マラレタルモノナリ乞フ此レヲ論セシ氏カ曰方今英國ノ貿易盛ニシテ商賣ノ世界ヲ壓倒スト云フ英國ニ軍艦多ケレハナリ魯西亞ノ國權強大ニシテ四隣ヲ威服スト云フ魯國ニ陸軍ノ盛ナルアレハナリ日耳曼ハ百年以來次第ニ國威ヲ皇張シタリト云フ日耳曼ノ常備兵ハ百年以來次第ニ増加シタレハナリ伊太利ノ進歩モ兵備ト共ニ進歩シ葡萄牙ノ退歩モ兵備ト共ニ退歩シタリシカラハ則チ古來今ニ至ルマテ兵備ハ國歩進退ノ大本ニシテ外交ニ就キ百般ノ關係モ之ニ由

テ左右セラル、モノト知ル可シト此ノ論疑ナキ能ハス下
 ニコレヲ論セン氏又曰憐ム可シ外務卿若シモ我々人民ノ
 協力ヲ以テ數十万ノ常備兵ヲ養ヒ數百艘ノ軍艦ヲ作テ武
 威ヲ海外ニ輝カスアラハ外交百般ノ關係ハ立トコロニ面
 目ヲ改メテ條約改正ノ如キ唯一朝ノ談判ヲ以テ其終局ヲ
 見ル可キノミ安ソ坐シテ區々ノ不如意ヲ歎スルヲ爲ンヤ
 ト此ノ論或ハ然ラン然レモ予ハ其今日ニ數十萬ノ常備兵
 ト數百艘ノ軍艦ヲ作り得ザルヲ歎スルノミ氏マタ曰我カ
 國昔年ハ四十萬ノ軍人ヲ養フテ之ニ武器ヲ貯ヘシムルノ
 ミナラス當時ノ軍人ハ各一家ヲ成シテ其妻子家族ヲモ人
 民ヨリ保護スルノ法ナルガ故ニ一家五口ト算シテ總計二
 百萬人ノ衣食ヲ給シタル其費用即チ軍費ハ實ニ容易ナラ
 サル高ナレモ我人民ハ毎年コノ巨額ノ軍費ヲ供シテ之ニ
 堪ヘタリ云々曩ニハ二百萬人ヲ養フノ資力ヲ有シテ今日
 ハ頓ニ之ヲ失ヒ復一步ヲ進ルヲ能ハサル歎證ヲ可ラザル
 ノ事ナリトイテ吾レ之レヲ証セン我カ國ノ國威ヲ皇張セ
 ンガ爲メニハ英國ニ均シキ海陸軍ヲ要スルトシテコレヲ
 算センニ英ノ軍費ハ一億四千八百〇七萬圓ナリ故ニ我カ

國ニ於テ同額ノ軍費ヲ要スルトシテ流通貨幣一億八千一
 百〇二萬圓餘ヨリ引去ルキハ残り僅ニ三千二百九十五萬
 圓餘トナル可シ融通活潑ナラサル我カ國ニ於テ此ノ少數
 ナル通貨ニシテ殖産工業ヲ隆盛ナラシメ得ベキカ誠ニ信
 シ難キヲナラスヤ顧テ英國ノ流通貨幣高ヲ見ルニ六億九
 千七百九十五萬圓ナリ今前額ノ軍費ヲ引去ルモ猶残り五
 億四千九百八十八萬圓アリ且英國ノ金融活潑ナル僅ニ七
 十三圓弱ヲ以テ百圓ノ輸出物ヲ製シ得ルノ割合ニノ我カ
 國ニ於テハ六百四十七圓強ニテ漸ク百圓ノ輸出物ヲ製シ
 得ル割合ナルニモ係ラス前額ノ大金ヲ軍費ニ引去ラバ果
 シテ如何ノ在様ヲ呈ス可キカ思ハザル可ラサルナリ再佛
 國ノ軍費ヲ考ルニ此國ハ一人ニ四圓十一錢一厘強ヲ出セ
 リ而シテ通貨ノ分頭ハ四十六圓四十二錢一厘ナリ英ハ一
 人ニ付軍費四圓七十一錢一厘弱ヲ出シ通貨ノ分頭ハ二十
 一圓八十六錢八厘ナリ左レハ今英ハ佛ニ比スレバ少數ノ
 通貨ヲ流通セシメナカラ大數ノ軍費ヲ出スガ如クナレモ
 佛ハ二百五十四圓ニテ百圓ノ輸出物ヲ製スルノ割ナレバ
 平均シテ此ノ大額ヲ出シ得ルモノナル可シ然ルニ我カ國

ハ僅ニ一人ニ付軍費三十一錢二厘強ヲ出スニ止マレトモ通
貨ノ分頭モ亦五圓〇六錢一厘ニ止ルヲ以テ見レバ此論ハ
實ニ時事小言記者ノ論トモ思ハレサルナリ

氏ハ昔年ハ四十万ノ軍人ヲ養フタリト云フト雖モ此ノ四
十萬人ハ盡シ大祿ヲ食ミタル者ニアラズ其大數ハ卒ノ如
キ小祿ノ者ノミ況ンヤ廢藩ノ際ニアリテ士ノ少數ナルハ
頗ル其藩ノ不面目ナリトノ感情ニヨリ以前ハ然ラザリシ
者モ些カ農商ニ異ナリテ藩主ニ仕ヘタル者ハコレヲ士族
トノ書出セシモノアルニ於テオヤ然レモ暫時ク如此トハ
一ツモナカリシト爲シ四十萬ノ士族ハ平均百石ヲ領セシ
者ト仮定シテ當時ノ米相場(天保元年ノ東京相場)一石一
兩二百九十文ニ由リテ算スレバ士族ノ一家ニハ百二十九
兩ノ歲入アリシ者ト知ル可シ此ニ四十萬ヲ乘スレバ五千
一百六十萬兩ヲ軍備ニ費セシナリ軍費ノ供給ヲ天保ノ昔
シノ如クナルモ氏ガ望ム英ノ軍備ノ半額ニモ滿タサルニ
アラズヤ況ンヤ當時ノ士族ハ軍職ヲ解キタレモ猶ホコレ
ニ公債ヲ與ヘテ以前ノ軍人ヲ今日ニ至ル迄養フノ實アル
ニ於テオヤ而シテ其公債額面ハ秩祿公債一千一百八十二萬

一千圓餘金祿公債一億七千三百六十三萬九千圓餘合計一
億八千五百四十六萬圓餘ノ大額ニシテ年々ノ利子モ一千
二百五十一萬六千五百圓餘ナリ故ニ現在ノ我カ軍費一千
一百一十六萬六千圓ヨリ多キヲ百三十五萬一千五百圓餘
ナリ又此ヲ合スレハ二千三百六十八萬一千五百圓トナル
即チ往時ノ費額ノ半額ハ今日モ猶ホコレヲ出セリ且前ノ
計算ニヨル時ハ四千萬石ヲ士族ニ給與セシ割ナレモ當時
ノ調査ニヨレバ我が國ノ石高ハ三千萬石余ニ過キサリシ
ヲ以テ士族ハ決シテ前記ノ如キ大額ヲ受取ラザリシトヲ
知ルニ足ルナリ況ンヤ當時ヨリシテ我が金銀貨ノ海外ニ
飛去リシモノ其數無慮一億萬圓ニ至リシニ於テオヤ其今
日ニ非常ノ軍費ヲ供出シ能ハザルモ亦宜ナリト云フ可シ
諸テ前ニ氏カ方今英國ノ貿易盛ニシテ云々ノ論ハ疑ヒナ
キ能ハサルヲ記セリ然ルニコノ言タルヤ第百八十三葉
ニ先ツ國ヲ富マシテ然ル後ニ兵ヲ強クスルノ策ニ及フ可
シ苟モ富國ニシテ強兵ナラザルハナシ富ハ強ノ本ナリト
ノ言アリ此言道理ニ於テ然ルカ如クニ聞ユレモ社會ノ事
跡ニ於テハ往々然ラサルモノアリト云ハレタルニ應スル

モノ、如シ而シテ氏ハ其例トシテ支那及ビ伊太里ヲ舉ケ
 ラレタリ故ニ予モ氏ノ例ニヨリテ辨セシニ支那ノ富國タ
 ルハ實ニ氏ガ言ノ如シ其兵ノ強カラサルモ予コレヲ否ト
 スルヲ得ス故ニ予ハ簡短ニコレニ答テ云ハシト支那ハコ
 レヲ爲サ、ルナリ我が國ハ爲サ、ルニ非ス爲シ能ハサル
 ナリ其証ハ前文已ニコレヲ論シタリ又伊太里ノコトハ疑ヒ
 ナキ能ハスト雖モ假リニ氏カ言ノ如シトスルモ商賣工業
 ノ事ヨリ内國交通ノ便利ニ至ルマテ日ニ進歩シテ今後其
 國ノ益繁榮富貴ヲ期ス可ケレハコレソ海陸軍モ盛大ヲ期ス
 可ケレ然ラサレハ此國モ決シテ今日ノ有様アル可カラサ
 ルヘシ今ヤ一步ヲ退キテ強兵ハ富國ノ本ナリトスルモ英
 國ニハ到底摸ス可カラス然ラハ國債ト紙幣多キ伊太里ニ
 摸センカ伊太里ノ軍費ハ四千九百二十五萬圓ナリ故ニ今
 日ヨリ増ス一猶三千八百五萬四千圓ヲ年々海陸軍ノ費ニ
 供セサレハ彼ニ摸ス可カラス然ルニ我カ國ノ歳入ハ僅々
 三千五百七十六萬八千圓ナレハ歳入ノ全額ヲ投スルモ増
 額ノ數ニ充ツルコト能ハス仍テ新ニコレヲ國民ニ課スルト
 スレハ政府ノ歳入ハ七千三百八十二萬二千圓トナレト伊

太里ノ歳入ハ猶ホコレヨリ多キ一億二億萬圓餘ナリ此ノ歳
 入アレハコレ彼ノ軍費ヲモ出シ得ヘケレ我カ國ニ於テ金
 銀紙幣ヲ合スルモ其流通高ハ二億萬圓ニ充サルニ如何ニ
 シテ二億萬圓餘ノ歳入アル國ニ摸スルヲ得ンヤ然ルモ無
 理ニ歳入ヲ増サントナラハ非常ナル大額ノ紙幣ヲ發行シ
 テ租額ヲ増サハコレヲ爲シ得ヘケレト左ナキダニ紙幣下
 落ノ歎アル我が國ナレバコレヲ實行シタランニハ却リ
 テ不測ノ禍ヲ生シ遂ニハ如何トモス可カラサルニ至ルモ
 未タ知ルヘカラサルナリ
 然ラハ國ノ獨立ヲ保護スルノ力ハ一ツモ今日ヨリ増ス可
 カラサルカ曰ク何ソ然ラン財政宜キヲ得ハ伊太里ノ如キ
 モコレヲ爲ス可シ英ノ如キモコレヲ爲ス可シ只今日ハ全
 國ノ資力ヲ舉ケテ海軍ヲ強大ニスルモコレヲ爲ス能ハサ
 ルノミコレヲ爲ス能ハサルハ氏カ強兵富國論ノ以テ行ハ
 ル可カラサル所以ナリ予ハ實ニ國權ヲ皇張セント欲スル
 モノナリコレヲ皇張センニハ國家ヲシテ富マシメサル可
 カラス然ラサレハ強兵ハ期ス可カラサルナリ否兵ヲシテ
 強ナラシム能ハサルナリ

論評

○答東京經濟雜誌

文學士 井上哲次郎

東京經濟雜誌九十六號並ニ九十七號ニ東洋學藝雜誌ヲ讀ムト云フ文アリ、之ヲ讀ムニ、其言錯雜シテ論法ニ合ハス然レモ我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキ或ハ東京經濟雜誌ヲ忘信スル者アラン、因リテ左ニ逐次辨明セント欲ス

駁者、東洋學藝雜誌ノ緒言ヲ舉ケテ曰ク「凡ソ世間新聞雜誌ト發兌スル者其腦中必モ自負の心あるハ辨ト俟たざれとも斯く現はに大先生振りて雜誌ト發兌スル者に至りてハ實にあるカシ」ト是等ノ事、固ヨリ答フルニ足ラスト雖モ、駁者ノ爲メニ其言ノ論法ニ合ハサルヲ示サントス、駁者ノ世間ト云フハ、日本ノミヲ云フカ又ハ萬國ヲ總ヘテ云フカ、若シ萬國ヲ總ヘテ云フキハ、古今ノ久シキ、東西ノ廣キ、新聞雜誌ノ數、其果シテ幾千萬ナルヲ知ラス、乃チ斯く現はに大先生振りて雜誌ト發兌スルもの「云々」實にありカシト斷言スヘカラス、若シ之ヲ斷言セント欲セハ、古今東西幾千萬ノ新聞雜誌ヲ知リ盡サ、ルヘカラス、古今東西幾千萬ノ新聞雜誌ヲ知リ盡サスノ之ヲ斷言スルハ論

法ノ本根ナキ者ナリ、若シ又日本ノミヲ云フキハ、日本ニハ現ニミル、フオ―セツト等二三或ハ四五ノ經濟書ヲ拔キ讀ミシ、早已ニ大先生振リテ雜誌ヲ發兌スルモノアルニアラスヤ然ルニ是レヲ之レ問ハスシテ直ニ「實にあるカシ」ト云フハ論法ノ本根ナキモノナリ假令ヒ駁者ノイハユル世間ヲ日本ノミヲ云フトスルモ、又萬國ヲ總ヘテ云フトスルモ、何レニシテモ、其「世間新聞雜誌ヲ發兌スルもの其腦中必モ自負の心あるハ辨ト俟たざれとも」ト云フハ全ク假定、即チ「アササムプシユン」ニテ證據ナキモノナレハ、論法ニ合ハス何ントナレハ、駁者ハ何ヲ以テ世間ノ新聞雜誌ヲ發兌スル者ガ皆自負ノ心アルト云フヲ知リ得ルカ、駁者ハ他人ノ心中ニ入りテ其情ヲ探リ得ルカ然ラサレハ駁者ノ言ハ假定ノミニシテ論法ノ本根ナキモノナリ、論法ノ本根ナキモノハ千言萬言ヲ累ヌト雖モ取ルニ足ラサルナリ、且ツ夫レ大先生振ルモ、又大先生振ル者ヲ駁シテ大先生振ルモ共ニ眞理ニ妨ケナキニ非スヤ、若シ大先生振ル者ヲ駁セハ、何ソ大先生振ル者ヲ駁シテ自カラ大先生振ル者ヲ駁セサルヤ

駁者又東洋學藝雜誌ノ緒言中ノ「我邦人ノ理學ノ思想ニ
 乏シキハ識者ノ大ニ憂フルトコロ也」ト云フ一段ヲ引ヒ
 テ曰ク「識者と云へるハ何國の人と云ふにや日本國中の
 識者にして既に之を憂ふ程の理學者あらハ邦人理學の思
 想に乏しといふべからざ」ト是レ何等ノ妄言ゾ、蓋シ駁
 者ハ絶エテ科學ノ法、即チ「サイエンス」ツク、コルチユ
 ール一ヲ有セサル人ト見エ、其言フ所皆論法ニ合ハス、請フ
 能ク其耳ヲ穿チテ之ヲ聽ケ、夫レ邦人ト云フキハ廣ク社
 會ノ上ニ就ヒテ云フモノナリ、單ニ識者ト云フキハ、社會
 ノ中ノ僅カノ人ヲ云フナリ、僅カノ人が理學ニ通スルト
 モ、邦人理學ノ思想ニ乏シト云ヒ得ベシ何ントナレハ、邦
 人ノ中ノ一部分ヲ占ムル識者カ識ル所ハ、其廣サト其深
 サトヲ合スルモ、邦人ノ中ニアリテハ實ニ乏シキモノナ
 レハナリ然ラハ邦人理學ノ思想ニ乏シト何故ニ云ベカラ
 サルカ、駁者又彼ノ緒言中ノ「天地ノ間万事萬物皆ナ理
 學ノ資ニ非ルハナシ、此事物ノ間ニ行ハル、天法ヲ檢定
 スルハ即チ理學ノ目的」ト云フ一段ヲ引ヒテ曰ク「理學者
 とも云はるゝ程のもの此の如き杞憂と抱かざるべし、

其故如何とあれハ「云々」日本社會に於て理學の思想乏
 きの其乏しき源因即ち天法ありて俄に改正し得べき者に
 もかく「云々」、ト蓋シ駁者ノ意ハ日本人ノ理學ノ思想ニ乏
 キモ亦天地間ノ一事ナレハ彼ノ緒言中ニ言ヘルカ如ク、
 宜シク理學者ノ資ナルベキニ反リテ、理學者之ヲ憂フル
 トスルハ、前後撞着スト、此ノ如ク思惟スルニ似タリ、是レ
 太古ノ人又ハ野蕃人カ理ヲ究ムルト同シク、極メテ膚淺
 ナルモノニテ余輩之ヲ讀ミテ一笑セリ、何ントナレハ、駁
 者ノ如キ者アルトキハ、益シ我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキ
 ヲ知ルヘキニ駁者ハ自カラ理學ノ思想ニ乏シカラスト
 ス、實ニ抱腹絶倒ニ堪ヘサルナリ、因リテ駁者ノ爲メ我カ
 絶エテ矛盾ナキヲ證セン、夫レ我カ官能ニヨリテ知ルヘ
 キ森羅万象ハ皆半ハ能ナリ、半ハ所ナリ、言ヲ換ヘテ之ヲ
 言ヘハ一物ニシテ其關係スル所ニ隨ヒ、能トナリ、所トナ
 ルノ理アリテ盡十方ノ中一物ト雖モ、然ラサルハナシ、先
 ツ動物ニ就ヒテ之ヲ言ハシニ、禽獸ノ類、皆生存競争ノ理
 法ニ隨ヒ、他ヲ制シ、又他ニ制セラル、他ヲ制スルキハ之ヲ
 能ト云ヒ他ニ制セラル、キハ、之ヲ所ト云フ、植物礦物モ

亦皆同シ、此ノ如キ動物、植物、礦物ノ三類ハ各、其數中ニ能所ヲナスト雖モ、又同時ニ三類互ニ能所ヲナスナリ、人所爲モ亦能所アルモノニテ若シ一ヲ欲クキハ、其害言フヘカラス、今日本人ノ理學ノ思想ニ乏シク蠅々然トノ醉生夢死スルモノハ知識上ニ於テハ（道德上ト物体上トハ格別ナリ）殆ント能ナクシテ唯、所ノミナリ、唯、所ノミナレハ何故ニ識者之ヲ憂フトナレハ其害識者ニ及ヘハナリ。故ニ識者之ヲ憂ヘテ多少ノ能ヲ得セシメントス、即チ理學ノ思想ヲ増サシメントスルモノナリ然ラハ駁者ノ妄想スル自家撞着ハ何處ニアルヤ

駁者又彼ノ緒言中ノ「今茲ニ理學ニ關係アル文章ヲ刊行シ世人ニ其性質及ヒ功用ヲ知ラシメ以テ時弊ヲ救フト」云フ文ヲ引ヒテ曰ク「此の如くは是れ自然の理と檢定する理學者にあらざる自然の理と作出する理學者あり」ト是レ何等ノ言ソヤ、彼ノ緒言中ニハ、絶エテ自然ノ理ヲ作出スルノ意ナキニ駁者ハ何ニ據リテ此ノ意ヲ得シヤ實ニ疑フヘシ、又駁者カ「時弊と救ふの非常ある望」云々ト云フニ至リテ笑止千万ナリ何ントナレハ、駁者ハ未ダ尋常ト

非常トノ何タルヲ知ラサルニ似タリ、夫レ人間世ニハ尋常ナルモノ少ナクシテ非常ナルモノ多クアリ、今夫レ人面ノ最モ尋常ナル者ヲ求メヨ最モ尋常ナル者何ソカアル今夫レ草鞋ノ最モ尋常ナル者ヲ求メヨ、最モ尋常ナル者何ソカアル、然ラハ尋常ハ非常ナラスヤ、非常ハ尋常ナラスヤ、且ツ夫レ駁者ハ如何ニシテ時弊ヲ救フノ非常ナル望ナルヲ知ルヤ、非常ト尋常トノ間、何ニ據リテ區別シ得ルカ、又何人ニ非常ナルヤ、何世何國ニ非常ナルヤ、駁者ノ言ハ皆此ノ如ク論法ノ本根ナキモノナリ

駁者ハ次キニ余ガ學藝論ヲ掲ケテ曰ク井上氏ウ強めて支那に摸倣して此の如き文章と記されしハ新機軸と出たされし主旨に合するや否やト、是レ余カ意ノ一半ヲ解スル者ナリ、何トナレハ余ハ、日本人ヲシテ摸倣スルヲ止メシメ、萬事萬物ヲシテ盡ク剽造ニ出テシメント欲スルニ非ス、但シ日本人ノ摸倣ヲ主トスルノ弊ヲ矯メ其レヲシテ多少剽造ノ効用ヲ知ラシメント欲スルナリ、然ルニ單ニ剽造ノ効用ヲ説テ摸倣ノ効用ヲ説カサルハ、時弊ヲ矯メソカ爲メニ文ノ抑揚ヲナスナリ、駁者何ソ是レ等ノ事ヲ

思ハサルヤ、夫レ社會ハ一人ノ如ク且ツ學ヒ、且ツ長ス。然レ且ツ長シ且ツ學フ爲メニハ必ス二種ノ原因ヲ要ス二種ノ原因トハ循ト改ト是レナリ、古人若クハ他人ノ教ヲ奉スルカ如キハ、之ヲ循ト云ヒ、自カラ新教ヲ唱フルカ如キハ、之ヲ改ト云フ、廣ク之ヲ言ヘハ古人若シクハ他人ノ所爲ヲ摸倣スルハ循ナリ、自カラ新機軸ヲ出スカ如キハ改ナリ、改ト循トハ共ニ社會進歩ニ缺クヘカラサルモノナリ、然ルニ今日日本ニテハ唯、循ノミ多クシテ改ノ方少ナシ、故ニ其民ヲシテ改ノ効用ヲ知ラシメント欲スルナリ、然ルニ駁者ハ此ノ意ヲ察セス、喋々摸倣ノ用ヲ説ク摸倣ノ用ノ如キハ、心理學上ノ事ニテ余ノ之ヲ知ルヤ駁者ヨリモ先ナリ、駁者何ソ此ノ贅言ヲ費ヤスヤ

駁者又學藝論中ノ古者云々ヨリ非全無根據也マテノ事ヲ元和以前ノ事トナス、是レ全ク駁者ノ誤解ナリ、余カ古者ト云ハ、廣ク疇昔ヲ總ヘテ云フ者ナレハ、元和以後ノ事モ亦其中ニアルト知ルヘシ、駁者又曰ク「先哲叢談前編に記載せる所の重なる儒者の姓名と列序して（先哲叢談後篇の儒者の名一人も見えず）皆な孔、孟、老、莊、に及ばざる

と證し」云々ト、余カ學藝論ヲ草スルヤ先哲叢談ニヨリシニアラス、然レ且ツ元和以後ノ儒者ヲ論スレハ、其名ノ先哲叢談中ニ見ユルモ、固ヨリ怪ムニ足ラス、反リテ、駁者ハ先哲叢談前後篇ノ大ニ異ナルヲ知ラサルニ似タリ、蓋シ後篇ノ載スル所ハ前篇ニ洩レタル人物ニシテ、取ルニ足ラサル者多ク且ツ文辭モ亦迥カニ前篇ニ及ハス是ヲ以テ假令ヒ余カ學藝論ヲ草スルヤ先哲叢談ニ由リシトスルモ其後篇ヲ取ラサリシハ決シテ怪ムニ足ラサルナリ

駁者又曰ク「余輩ハ西洋人も亦た印度、猶太人に及ばざるなれば釋迦、耶蘇の輩と出さざれば也」と云はんと欲するなり」ト、西洋人ノ中ニハ釋迦、耶蘇匹敵スル者勝ケテ數フヘカラス、アリストートルノ如キ、牛董ノ如キ歌傑爾ノ如キハ釋迦、耶蘇ニモ勝ルト云フヘシ、然レ且ツ日本ニハ孔、孟、老、莊ト匹敵スル者一人モ之ナキニ非スヤ駁者ハ之ヲ知リナガラ何ヲ苦ミテ此ノ妄言ヲナスヤ、駁者又曰ク「孔、孟、老、莊、と今日に喚起し來れ馬ぞ凡々たる人物ならざる」と知んや一ト是レ亦妄言ナリ、何ントナレハ孔、孟、老、莊、ヲ今日ニ喚起シ來ラハ其爲ントスル所、豈其爲シタルガ如ク

ナラシヤ必スヤ異ナル時ト異ナル勢トニ應ジテ其所爲ヲ
 異ニセンノミ、駁者又曰ク其語の解しかく其名の古き
 と以て非常ノ價と付とるは私に理學者ある井上氏の爲め
 取さる所ありト、余カ孔、孟、老、莊、ヲ豪傑視スルハ其語ノ
 解シ難ク其名ノ古キカ故ニアラス然ルニ余ヲ以テ其語ノ
 解シ難ク、其名ノ古カ故ニ孔、孟、老、莊、ニ非常ノ價格ヲ付
 ストス、駁者ハ抑々何ノ據リトコロアリテ此ノ言ヲ發ス
 ルヤ、冤ナリト謂フベシ

「駁者又曰ク抑も社會に大理あり、野蠻の社會一飛して文
 明の社會とある能わさる」云々ト、是レ等ノ論ハ何ノ爲メ
 ニスルヤ、余更ニ駁者ノ意ヲ解ス能ハス、何トナレハ日本
 ト支那トノ間ニハ野蠻ト文明トノ如キ甚シキ差アルヲ見
 サレハナリ、是レヨリ以下駁者ノ言フ所大抵妄誕無稽、答
 フルニ足ラス、特ニ其模倣ノ善徳タルヲ述フルカ如キハ
 死屍ヲ斬ルト同シク無益ノ事ナリ、何トナレハ、余ハ模倣
 ヲ以テ否徳トスルニアラス模倣ノミヲ主トシテ絶エテ創
 造ナキヲ否徳トスレハナリ、駁者又曰ク創造の如きは必
 しも國家に有益ある者にあらざるあり、抑も創造のもの

たるや數多の日子と費やさるべうらと數多の元費ヲ空
 くせさるべうらと、其發明成りて而して其人利とるうト、
 此ノ如ク蒙昧ナル駁者ハ之ヲ啓クノ方ナキニ苦シム、今
 夫レ泰西ノ文明ヲ見ヨ、何ヲ以テ成ルカ、電信、火船、火車
 及ヒ其他百般ノ機器ヲ創造シタルニ由ル、然ルニ今ニ至
 リテ疲弊ヲ致サスシテ反リテ文明ノ域ニ達シタルハ何ノ
 故シ、創造ノ時ニ當リテハ、費ヤス所多シト雖モ、其後日
 得ル所ハ其前日費ヤシタル所ヨリ多キヲ以テナリ夫レ理
 財ノ法ニツアリ、費ヤサルト費ヤシテ益ヲ得ルト是レ
 ナリ、然ルニ始ヨリ費ヤサルトヲ務メハ、是レ理財ノ法ニ
 戻ル者ナリ、且ツ夫レ文明ハ高價ナリ、費ヤス所多キニア
 ラサレハ、決シテ至域ニ達スヘカラス、而シテ文明ノ高價
 ナルハ主トシテ創造ノ欲クヘカラサルニ由ルナリ、駁者
 是レヲ之レ知ラスシテ、徒ニ模倣ノミヲ説ク、是レ其平生
 模倣ノミニニ從事スルカ故カ、若シ模倣ノミニニ從事スル
 ガ國家ニ益アルコトナリシナラハ、各國皆創造ヲ廢シタリ
 シナラン各國皆創造ヲ廢シタリシナラハ、豈今日ノ如キ
 郁々タル文明ノ光輝ヲ見ルヲ得ンヤ、駁者ハ絶エテ哲學

しも國家に有益なる者にあらざるあり、抑も創造のもの

郁々タル文明ノ光輝ヲ見ルヲ得ンヤ、駁者ハ絶エテ哲學

經練即チ「フヒロソフヒカル、ヂスシプリ」ナキ人ト見
 ヲ、物ノ一端ヲ見テ兩端ヲ見ル能ハサルナリ、駁者又曰ク
 儒者の孔、孟に於けるハ耶蘇教徒の耶蘇に於けるウ如し、
 耶蘇の教徒にして耶蘇と凌駕せば何ぞ耶蘇教徒たらん儒
 者にして孔、孟と奉せざられば何ぞ儒者たらん云々ト、駁
 者ハ未タ儒者ノ何タルヲ知ラサルニ似タリ、實ニ憫笑ス
 ヘキナリ、夫レ儒者一ニアラス、游侠ノ儒アリ、文史ノ儒ア
 リ、曠達ノ儒アリ、智叟ノ儒アリ、章句ノ儒アリ、事功ノ儒
 アリ、道德ノ儒アリ、何々ノ儒アリ儒者一ニアラス、故ニ
 孔丘ハ儒ニ君子小人アリトシ、荀卿ハ儒ニ上下アリトシ、
 揚雄ハ天地人ニ通スルヲ儒トス、儒者ト云フハ孔子孟カ從
 者ノミヲ謂フニアラス、總ヘテ學藝ニ達スル者ノ稱ナリ、
 然レモ耶蘇教徒ト云ヘハ耶蘇ノ徒弟ノミニテ儒者ノ孔子孟
 ニ於ケルト同日コシテ論スヘカラス、然ルニ駁者ハ二種
 ノ事實ヲ混同シテ論ス豈亦便利ナル論鋒ナラスヤ、駁者
 又余カ專攻學社記ヲ引ヒテ曰ク「畢竟此の如き訓誡の文
 と記とると好ませらるゝものと見えたり」ト、駁者試ニ唐
 宋明清ヲ問ハス、凡ソ名家ノ文ヲ見ヨ十ノ七八ハ訓誡ノ

文ナリ、何カ故ニ余カ文ノ訓誡ナルヲ怪シムヤ、又訓誡ノ
 文ナレハ如何ニアルヤ、訓誡ノ文ナレハ、惡シキカ、訓誡
 ノ文ナレハ善キカ、駁者又曰ク「願クハ世の惡習と喋々ト
 ると止めて先づ自ら始められんこと」ト、駁者ノ親切ナ
 ルヲ、此ノ如クナレハ、實ニ吾黨ノ士ニテ復其言ノ論法ニ
 戻ルヲ問フニ暇アラス、余ハ他人ト同シク固ヨリ摸倣ス
 ルヲ免レスト雖モ、亦多少ノ剽造ヲナサント欲ス、學藝專
 攻ノ二雜誌ヲ發兌スルモ此ニ意アルナリ、何ソ復タ駁者
 ノ勸メヲ俟タマ

雜錄

余曩ニ同郷ノ巨儒沖堂片山先生ノ平賀源内傳ヲ得
 タリ今本誌ニ掲ケテ以テ平賀翁ヲ敬慕スルノ士ト
 其慶ヲ同フスト云
 川田德二郎識

○平賀源内傳

平賀源内名國倫字士彝。號鳩溪。我讚志度浦人也。其先曰
 平賀入道源心。係信之豪族。而爲武田晴信所滅。後裔自信
 徒讚。居數世。出高松藩爲小吏。實源内之父也。源内爲人聰
 敏奇傑。少好本草緒鞭之學。源穆公聞之。辟掌藥方。賜俸四

口銀十錠。公多聚和漢西洋動植諸物。辨其名。寫其形。以備

參考。源內與有力焉。寶歷十一年時年三十致仕。僑居江門。師官

醫田村元雄。專精物產。頗得出藍之稱矣。其行事類游俠。食

客滿家。性好奇功。明和改元甲申。手織火浣布。獻之府朝。

七年庚寅。游瓊浦。主大通詞吉雄某幸左工門學隔蘭本草。先是

製電理機寒暖計諸器。其他發明出人意表者甚多。不遑枚

舉。又傳人蓼培養之術。大利國用。而我讚之製砂糖。亦其所

嚆矢矣。源內在江門。屢轉其居。最後有一凶宅盲人貪利暴富。事發處刑

或曰神田某坊。人不敢住。源內故買之。朋輩或止之。乃曰。

或曰馬喰街。世傳怪物。而吾未經驗。儻幸得見之乎。既而半歲。果不得良

死也。蓋源內為某侯營築別業。或曰。田沼侯意次也。然意次之卒。在前二年。恐失實。

與一商人共之。風波忽起。遂殺其人。而事出註誤。源內亦自

裁未殊也。隣解救之。即日下獄未盈三旬。病傷而死。實安永

八年乙亥十二月十八日也。享年四十有八。據安原枝澄考賜屍從弟

某。讚之鄉士平賀權大夫葬于橋場聰泉寺門內之左。其友杉田玄伯。

酒井小濱侯醫員損私財。建墓碣題曰。智見靈雄。所著物類品隲。

火浣布畧說。及傳奇院本。合二十餘部。多傳於世者。其戲作

綽名曰風來山人。曰天笠浪人。曰福內鬼外云。截錄浪華南山道人述諸

家人物誌。太田南畝著一話一言。舊藩

執收木村默老隨聞記。及綾野氏雜錄。六石子曰。余觀鳩溪之事跡。磊落奇偉。誠一世之雄哉。其製

器械。見者驚猶神。當此時。西洋學未闢。而彼既着先鞭矣。讀

火浣布畧說。亦可以推知也。况於有益國家乎。

附錄

亡友長尾子德嘗為余傳故老之談曰。源內去讚。居江門。會

藩儒士某子德以為青葉士弘。然時世不相當。或曰。菊地崧溪也。亦寓昌平巒。一日源內

邂逅途中曰。先生近况何似。答曰。刻苦嘗柏耳。吾子何事曰

僕業物產。時得贏餘也。(三土元節云。語晤如見)今日幸相

逢請奉一觴先生。因共投旗亭。偶有一貴客。遣從者來言曰

聞平賀君在此。少間願相見也。源內乃延之別座。客出一奇

品曰。向使衆識者鑒之。無能辨知。敢問其所出與名物。源內

一閱。即曰。是西洋某地所產。而某名某物也。客大悅。出數

金。鳴謝而去。源內復席曰。僕得黃白如此。先生宜盡醉飽可

矣。儒士愕貽曰。吾子博物乃然。抑不知何以得認之。源內笑

曰。衆人所難辨。僕何能知之。亦唯英雄欺人耳。相共絕倒(五

弓士憲云。某先生迂駭之狀。宛然在目。元節云。讀者亦絕倒

又曰源內游瓊浦。二三門生從行。至赤馬關。路費殆盡。門

生大懣。源内曰勿憂也。汝往購一古銅確來。既而入夜。縱々焉。〇〇〇。天明則黃金確成矣。街賣而充費云。(元節云莊

子庖丁之文脈)。余少時侍先考恬齋翁茶話曰。源内之在志

度浦也。浦人問活計。時近歲暮。曰。汝多買黃橙。捆載小舟。

又取海紅柑。置之上層。航抵浪華。叫賣黃橙。如其言。都人

見之。謂田舍漢不辨柑橙也。問其價乃以爲橙則貴矣。在柑

則太廉。舉一舟買之。撤其上層則悉皆橙也。(井上逸卿云。

奇事奇筆。使人絕倒。士憲云。癡之賣點。皆用此術)然價已

定。不可中輟。遂得利而還。是雖瑣事。亦足以見其機敏矣。

元節云。機敏二字一篇柱礎

中村子楡云。附錄敘事活動。如接見其人可謂無遺憾矣。

附錄評

五號士憲云。予亦稔聞源内之爲人。而恨無爲撰一文記其素

行。今佳傳成于其鄉賢之巨手。不獨慰予之渴望。源内泉下之

目亦瞑矣。嗟乎如元章並玄伯。可謂源内身後二知己也

本傳評

又云。點綴交友談話。輕々叙去。得附錄體。隱然學張中丞傳

後序。

附錄評

藤澤君成云。儼然史論。平賀士實不朽哉

本傳評

又云。敘事明暢。大手筆哉。

附錄評

三士元節云。質實簡明。却是勞力處。

本傳評

又云。本傳所述。平恒爲人。是源内之体矣。附錄。則言語機

敏變化無窮者。是源内之用矣。故文之奇與否。固有由焉。比

之本傳。似倍許多光焰者乎。

井上逸卿云。敘事簡明。非老手不能。

○頃ろシエークスビール氏の「ハムレット」中の一段と

譯せり依て江湖諸彦の一粲と博と幸に文辭の鄙俗と

尤むる勿れ

尙 今 居 士

かぐるふべきり但し又。かぐるふべきに非るり。爰が思案

のしどころぞ。運命いりにつたあきも。これに堪へるが

大丈夫り。又さはあらで海よりも。深き遺恨に手向ふて。

之と晴ららざるものふり。とぶも心に落ちりぬる。扱も死

かんか死ぬるのり。眠ると同じ眠る間り。心痛のみり肉体

の。あらゆるうきめ打捨つる。是ぞ望のはてあらん。ア、いし

ぬ、ぬむるぬむる時。萬が、一、め、み、る、あ、ら、ば、ハ、ア、こ、ご、わ

りが有るやうぢや。あせと日ふに死に眠り。無常の風にさ

雜報

そはれて。此の娑婆離れしもふとも。いうる夢のささる
 やらハテ疑ひの晴れぬもの（井上巽軒曰、千古同感）うき
 事長く忍ぶのも。これが爲めうき、あせあれば。九寸五分
 さへ持ちさる。其切先て一とつきに。事とまともやと
 けれど。之とば爲さず、慎みて。強者の非道、世のそしり。驕
 れる人のはづらしめ。想ふ美人の不深切。緩み過ぎさる國
 の法。貴人の無禮又さへ。下人とあれば、善とても。輕
 しめらる。是と之れ。堪へ忍ぶの何故ぞ。重荷と負ひて
 汗流しうい目つらい目こらへつ。暮せぬ暮し暮そのも。
 亦何故ぞ是のみ。死後の恐れが有るうらや。死出の山
 路の不思議ある。登つて歸る人ぞあま。如何なる事のある
 やらん。物とごくこそ思はるれ。さへ此世に止まりて。
 うきかんかんと嘗るとも。あの世の事の恐しや。（井上巽
 軒曰、畏死之情述得精妙）斯くと心に思ふ故。さけき心も
 弱くあり。如何ある深き大望も。花と開りを枯れ失せて。實
 のあることぞかりける。左のさりながらおヒリヤよ。ア
 アたとやうか其風情。そあさ神といのるから。わしが罪
 障わびてたべ

○露國化學士ヂットコル氏の發明せし石炭油と凝結せし
 めて固形体と爲その法と聞くに其法最簡易あり即ち石炭
 油の其量二分（百分の二）の石鹼と混和せしむるときに恰
 も器と共に其容と方圓にそへき石炭油も忽ち凝結して透
 明の固塊と變をべし又之れを舊の如く流動の石油とあし
 て點火の用に供せんには少量の酢とアラムトと注ぎ掛る
 時の石炭塊の忽ち溶解して舊の石炭油と化し之に火と點
 てるも毫も障害あるとあしと儲石炭油と斯く忽にして凝
 塊とあし又忽にして流動物と化せしむるの効用の尋常の
 石炭からんに容函と精製して漏出と防がさるへうらさ
 れとも之を固形体と成を以上の如何の箱にも詰め得へく
 如何の方法と以ても運送し得へければ運賃と減少する夥
 多く恐くの現今石炭油の相場と半減せしむに至るへしと
 云ふ

○左の東京名家墳墓表の天台道士が諸名家の墳墓の東京
 に在るものと搜索せられさるものありとて寄送されけれ
 ば掲げて以て同好の士に頒つ

- 伊勢貞丈、古實 西久保大養寺 伊能忠敬、曆數 淺草源空寺
 - 英 一蝶、畫 芝二本榎承教寺 服部南郭、儒 品川東海寺中
 - 林 道春、儒 牛込北山伏町 細井廣澤、書 等々力滿願寺
 - 小野蘭山、物産 淺草誓願寺 荻生徂徠、儒 三田長松寺
 - 大田錦城、儒 谷中一乘寺 荷田在滿、國學 淺草金龍寺
 - 柄井川柳、狂句 淺草新堀 龍寶寺 加藤千陰、歌 本所回向院
 - 川村隨見、工業 四ッ谷天龍寺 加茂真淵、國學 品川東海寺中
 - 蒲生君平、儒 谷中臨江寺 桂川甫周、醫 芝二本榎 上行 寺
 - 吉田松陰、兵儒 骨ヶ原回向院 高橋東岡、曆數 淺草源空寺
 - 太宰春臺、儒 谷中天眼寺 探 幽、畫 池上本門寺
 - 谷 文晁、畫 淺草源空寺 中澤道二、心學 本所猿江妙壽寺
 - 賴 三樹、儒 骨ヶ原回向院 村田春海、歌 深川本誓寺
 - 室 鳩巢、儒 大塚御厩島 梅田源次郎、儒 淺草海禪寺
 - 宇田川玄隨、醫 淺草誓願寺中 山本北山、儒 白山本念寺
- 長安院 (以下次號)

○佛國モンゴルヒール兄弟が始めて輕氣球の工風とを
せしの紀元千七百八十三年のこと也しに爾後多く改良と
かし今とかりての氣象學とどのに要用ある一具とかりた

るに本年のその第百年期に相當とれ、同國の氣象學會より
政府に乞ひ委員と撰みシヤム、エリセ一宮に於て氣象學
に關する博覽會と開くよしまる同日に國中の諸方にて一
時に輕氣球と放たんとの趣考ありといふ

○東京大學理學部博物場長杉浦重剛君に、東京大學豫備
門長に任せられり曾て君の英國に留學して化學と研究
し同國化學會の會員よりまた英國法學院におゐて狀師の
學位と得られりる穂積陳重君に、法學部長に任せられり

○大學總理加藤弘之君の日本文明史の著述に従事され其
第一篇の已に脱稿し文學士井上哲次郎君の大學御用係と
命せられ史學と教授し側ら東洋哲學史の編纂に従事され
老莊、列、揚、墨、孔、孟、荀等の粗々脱稿と又法學部御用係法
學士宮崎道三郎君に、東洋法理沿革史の編輯に従事し居
らるる由

○本誌第一號に殺生石の事と記し學士の探索と俟ちて再
ひ報道せんことと約せしが今理學士吉田君の試験せられり
る結果と報せられりる左に掲ぐ

余ハ渡邊氏ノ驗査セヨトテ奇セラレタル殺生石ノ分

析的結果ヲ報知セントス渡邊氏余ニ告テ曰ク殺生石

ノ近傍ヨリ毒氣ノ發生スルヲ多量ニシテ一日ニ三回

殆ント時ヲ期シテ起ルモノ、如シ殊ニ雨後ヲ以テ甚

シトスト余カ得シ所ノ石ハ黝色ニシテ（普通ノ硬質ナル硫鑛ノ

黃色ヨ）稍、破碎シ易ク火ニ投スルキハ青焰ヲ發シ後

ニ黒キ嵩杖ノ殘滓ヲ留ム下寧ニ試料ヲ撰集セル後分

析セシ結果ハ左ノ如シ

遊離硫黃 四七、八二 水 一、七六

硅土四四、三〇（硫黃ヲ除去シテ計算セハ則） 鈦土四〇

第二酸化鉄 四、八九 石灰 二一

ソーダ 五三 波タシ 一八

苦土及ヒ 痕跡

硫酸 通計一〇〇、〇九

水ノ量即チ一、七六ハ鹽化鉛管ヲ以テ直接ニ檢セル

モノニシテ多少シ化合セル水ニハアラサルヘシ硫黃ハ

揮發シテ多少減却スルノ患アルヲ以テ攝氏ノ百五度

乃至百十度ニ於テ試料ヲ乾燥スルハ殆ント難シトス

硫黃ハ二硫化炭ヲ以テ石ヲ所置スルヲ數回ナル後攝

氏百五度ニ於テ乾燥セル漉紙（豫メ秤量セルモノ）上ニテ定量

セリマーシ鑑識法及ヒ硫化水素ヲ以テ密ニ試驗セシ

モ砒素及ヒ有毒金屬ヲ發見セサリキ以上ノ結果ヲ一

覽セハ二條ノ著明ナルモノアラソ即チ硫黃及ヒ硅土

ノ甚タ多量ナルヲ是レナリ（是レ有益ナル硫鑛ナリ

須野近傍ニテハ往々此石（後ニ聞ク所ニ據レハ那

ヨリ硫黃ヲ採集スル由）余ハ鑛ノ性狀ヨリノ考フ

ルニ硫黃ハ硫化水素ノ空氣及ヒ水蒸氣ニ逢フテ分解

セルヨリ生スルモノニシテ硅土ハ亞硫酸氣ノ酸化ニ

依テ生セル硫酸ノ爲メニ灰花（チツツア）ノ分解セルモノヨリ來

レリト思惟ス蓋シ亞硫酸氣硫化水及ヒ水蒸氣ノ發出

ハ渡邊氏其他ノ諸君ノ通知セル所ニシテ以上ノ如キ

分解ハ往々火山地方ニ見ル所ノ現象ナリ茲ニ箱根大

地獄ノ灰花ノ分析ヲ掲テ之ト同様ナルヲ證セン

硅土 九一、九七 鈦土 二、九二 第二酸化鉄 〇、三三

石灰 〇、四九 苦土 〇、一三 波タシ 〇、一三

ソーダ 〇、三〇 水 三、五〇 硫酸 〇、三二

那須野ヲ目撃シタル渡邊、青山兩氏ヨリ聞ク所ト分析

上ノ結果トヲ合シ之ヲ推究スレハ (古ヨリ口碑ニ傳
ヘ近年ニ到リ往々聞ク所ノ報道及ヒ臆想ニ關セス)

余ハ殺生石ハ自ラ毒性アルモノニアラスシテ空氣ヲ

不純ナラシムル硫化水素ヲ危害ノ主ナル原因ト云ハ

ントス呼殺生石ハ唯々ニ一種ノ硫磺ニ過サルモノカ

若シ余カ説ト意見ヲ異ニスル學士アラハ請フ爲メニ

教ヲ垂レヨ

吉田彦六郎白

○伊藤圭介矢田部良吉松原新之助其他有志の諸君にて植
物園の事務所と借受け植物會と開設せんと目今専ら靈力
し居らるゝ由

○伊藤錦窠先生の八十賀會と來四月十六日上野不忍生地
院に開うれ當日の賀來飛霞、田中芳男、宍戸昌の三氏が會
幹とあり先生所藏の物品、辨説の勿論遍く珍籍秘笈と集
めて陳列し出品圖說等とも鏤行せらるゝ目的の由おれの
定めて盛んかるとあるべし

○岩城國岩前郡平驛近傍の炭脈四方に蔓亘せるが時々地
中より火炎と吹出ることあり數年前或家にて堀井と試み
しに地下數十尺にして忽ち火柱と噴吹し爲めに一時の驛

中の住民も騒動せり今又一報と得るに昨年中紀伊國有
田郡栖原村の一寺内の地中より青色の火と生し數十日燃
續したる由且此近傍も同じく所々に炭脈と見ることあれ
バ平驛のものと同しく輝發瓦斯に由つて起るものあらん
○皇國第一と稱せらるゝ紀州那智瀑布の俗に八十四丈と
云へども「ア子ロイド」晴雨計と以て測りしに凡そ三百七
十五フィートありし由

○東京大學之有志輩が相集り毎月一回つゝ親睦且學術上
參考の爲め講釋、人情咄、淨留理、義太夫等に巧かる者と
招き聽聞せらるゝ由にて既に此程其第一會と開うれ有名
かる三遊亭圓朝、竹本綱太夫、鶴澤清六、柴田南玉、等と招
かれさるよし

那野野ヲ目撃シタル渡邊、青山兩氏ヨリ聞ク所ト分析